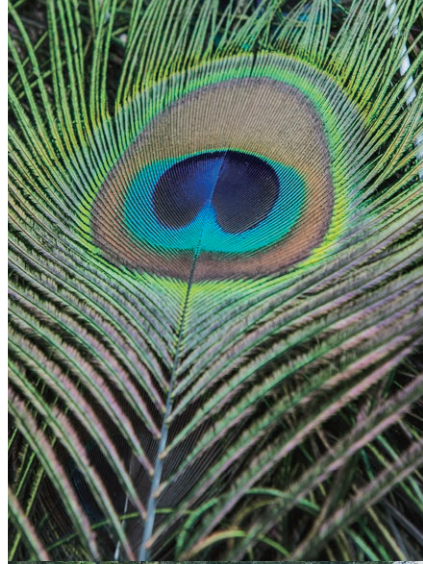




飼育員の金子さん



クジャクたちはドームの中で自由に暮らしている。

東

彼杵郡川棚町にある大崎自然公園は、週末ともなれば親子連れなどで賑わうレジャースポット。公園内には「大崎くじゃく園」があり、約二百羽のクジャクが飼育されている。ここで見ることできるののは、首元が青色のインドクジャク、緑色のマクジャク、そして全身が真っ白で神秘的な姿のシロクジャクの三種。

大崎くじゃく園は、一九六三年にインド政府から日印親善の印として、十羽のクジャクが贈られたのがきっかけで開設された。クジャクに特化した施設は全国でもここだけだそう。川棚町ではクジャクがまちのシンボルとなっており、橋の欄干や電灯の飾り、お菓子にいたるまで、さまざまな場所でクジャクをモチーフにしたものを目にする。

飼育員の金子裕司さんによると、園では毎年、出産シーズンを迎える六月から七月にかけて約百五十羽のヒナが生まれるという。しかし仲間同士のケンカなどさまざまな要因で成鳥になれない個体が多く、立派に育つのは、わずか五分の一ほどだそう。「産まれた卵は回収して、ふ卵器で約一カ月かけてかえしてします。それからは環境や健康状態のチェックなど、気が抜けません。半年ほどで首も足回りも太くがっしりとなり、オスとメスの判別もできるようになります。そこまで来てようやく、もう大丈夫だと安心しますね」。

クジャクの寿命は長くて十五年ほど。その間、オスには厳しい戦いもある。オスのクジャクが美しい飾り羽を広げるのは、春から初夏にかけての繁殖期。目玉模様のきれいな羽は、オスがメスに愛を伝えるためのものだ。しかしプロポーズが必ずしも成就するとは限らない。時には三角関係に発展することもあるそうで、オス同士が命懸けの戦いを繰り広げることもあるという。

金子さんは、美しい飾り羽はもちろん、クジャクの鳴き声にも注目してほしいと話す。確かに園内を歩いていると、聞き慣れない甲高い鳴き声が聞こえてくる。「クジャクは警戒している時や求愛の時など、その時々によって鳴き声が変わります。たまにネコのように鳴くこともあって、面白いですよ。多くの人にクジャクのことを知っていただきたいですね」。そう話す金子さんのそばで、ヒナたちが可愛い鳴き声を上げていた。

クジャク

まちのシンボルとしても
愛される鳥。

